

《はしわたし》における図像の成立と意味

——メネストレル主催若手セミナー・国際シンポジウムへのポスター及びチラシにおける——

本橋 瞳

(絵師・立教大学教会音楽研究所研究員)

2017年度初頭、メネストレル準備委員（日本代表）の田辺めぐみ（帝塚山大学）女史より、「若手セミナー《中世学のネットワーク》及び国際シンポジウム《中世における文化交流——対話から文化の生成へ——》」（時：同年11月17～19日、於：大和文華館）におけるポスター及びチラシの制作を依頼される。「文化交流」や「和平」に視座がおかれた学際的なシンポジウムの、日本における初の催しという趣旨説明とともに、コンセプトに見合う図像や構成などについてEメールによる話し合いが続けられた。

田辺女史は中世美術研究、とりわけ写本を専門とされているため、先立って中世写本より同趣旨に好ましい図像を幾つか提案していただいた。うち「ノアの箱舟」図像の「鳩」に、まず平和の象徴、「和平」が重なり、さらに箱舟と新天地をつなぐ「橋渡し」としての役目、「交流」が見出された。また女史より、植物モチーフとして「救済」の象徴であるクワガタソウの挿入希望があった。その後、シンポジウム会場となる大和文華館の方より、シンポジウム趣旨とも深くつながるといふ、初代館長、矢代幸雄氏の意向が反映された同館建物をモチーフとしては如何かとの提案をいただく。

箱舟のノアへ陸地のありかを告げる鳩は、くちばしに植物を啜える。植物はオリーブが通常（創世記8章11節）だが、提示された中世写本のそれには「葉のない白い花」が三束、添えられていた。そこで「クワガタソウを口にする鳩の飛来」が浮かぶ——「和平」（鳩）が「救済」（クワガタソウ）をもたらすのだ。「救済」は、「助力」や「改善」あるいは「好転」、もしくは「ポジティブな改革」にも敷衍しうる。学際的な会合がまさに「交流」の場となり、専門研究のみではおとずれなかったであろう、新たな境地への「助力」、「改善」、「ポジティブな改革」、「救済」ともなるならば、図像として聖書の記述と違えど、同シンポジウムの趣旨に大いに呼応するものとなるだろう。

後日、大和文華館の建物をモチーフに、との打診があったおりには、「箱舟」ではなく同建築物が鳩の飛来先に佇むイメージが浮かぶ。大和文華館——蒼き白と深き藍との織りなす粹。直線と格子の鳴動が、日本の城壁の幻影を現前せしめながら美しき旋律を奏でてゆく。館内には竹林生い茂る中庭——ガラスに仕切られた方形空間が突如として穿たれる。鉛色に濡れた木の柱、梁、壁、調度品は、斜光にまみえれば美しき茜と鱗甲の色彩を織りなすことだろう——玄関間の開口部からほのかに灯りゆらめく、太陽のごとき陽炎——建物を纏う光。

陰と陽——反転。鳩は、同配色の三日月の光輪をその身に纏う。クワガタソウ——紫の「救済」たずさえて。「あかねさす 紫のゆき 鳩の月 昇りやみづや 君が素手ふる」と、かの有名な額田王の歌（『万葉集』巻1・20）にもかかろうか——制作はもっぱら素手で行われる。

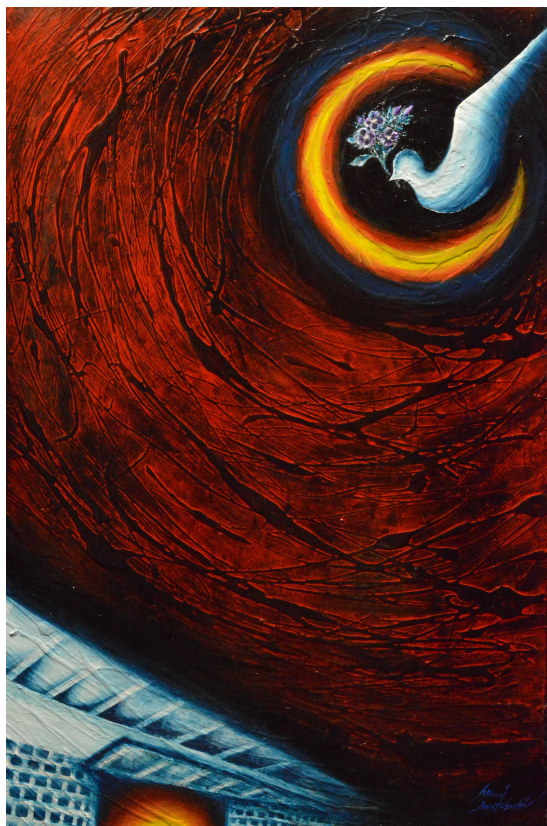
地の光と天の光との邂逅の約束——空の大渦。鳩を中心に放射状にうねる漆黒は滔々と建物へつづいてゆく。あるいは建物の縁から放たれるそれが「地から」の「力」となって鳩へとつづくのか。うねりは、鳩と建物を隔てると同時に連結させるヴェールであり、仲介、「橋渡し」である。

〈はしわたし〉——〈はし〉「橋/端/箸...」〈わたし〉「渡し/私」——文化のみならず「交流」の前提たるところの相互現前に、あまねくかくのぞまれる境地。動植物は遺伝子を子らへ〈わたし〉、植物は二酸化炭素から酸素を〈わたし〉、また花粉や種を〈わたし〉て——蜂や蝶、虫たちは花粉を別の花々へ、また己が巣へ、鳥は種を遠き土地へと〈わたし〉てゆく。無私として、生き生きと——〈はしわたし〉の真のあり方。

翻り、人間は思想や文化、伝統も〈わたし〉ゆく、常に相互的に——自らが〈はし〉となり、〈わたさ〉れ、受け取ったものをつぎつぎに...。ただし、〈わたし〉てはなるまい——戦争、紛争、飢餓...悲劇を。故に、我々は未来へ〈わたし〉ゆくにふさわしきを〈わたし〉、〈わたし〉ゆくにふさわしからずを決して〈わたさ〉ず、そしてそれらを真に分別する目を養い続けよう——未だ見ぬ子らの笑顔のために。

メネストレル、若手セミナー・国際シンポジウムにおいて、大和文華館は人と人を、あるいは人と情報との〈はしわたし〉となり、田辺女史はメネストレル関係者と同シンポジウム関係者の間の〈はしわたし〉となり、当方は女史からの情報と絵との間の〈はしわたし〉となる。ポスターとチラシの図像もまた、情報を人々へ伝える〈はしわたし〉となってゆく。

題名《はしわたし》——大和文華館に集う人々の間へ、鳩たる「和平」とともにクワガタソウの「救済」の天啓が舞いおりる——天地陰陽の一致はすでに約束されている。新たな境地へ——まなごしは遙か、輝く未来に向けて。



本橋瞳《はしわたし》板・水性ペンキ、素手描き、910x600mm、東京、2017年